
愛獣 AIJU

布袋しぐれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛獣 AIJU

【Nコード】

N2538BA

【作者名】

布袋しぐれ

【あらすじ】

違法商売、そう銘打つ、その秘密の花園で。耽美なる行為にその身を任せ、ただ夢を売る人間がいた。

人々は彼ら、彼女らを鼻先で笑いながらそれでも、縊る。

・・・今日は沢山あげるからね、チップは弾む。

何でも欲しいものは揃っているのに、ゴージャスに幾ら纏ったって、この飢えはきつと癒えない。

どこで生まれて、どこで育ってもいいじゃないか。関係ないから。

色町に咲く、孤独で甘美で、渴いた花たち。

布袋しぐれ、渾身の力作。夜の街を舞台に繰り広げられる、耽美な
るも寂しげな物語。このギリギリに最高に美しく汚い話を愉しんで
ください。

プロローグ

この町は汚い。けれど、落ちては戻れない。二度と羽ばたけない、失墜の楽園。

愛に飢えるなんて戯言のように。

もう飢えない人などいないんだろう。渴いた花、干乾びた耽美な夢で噎せ返るほど苦しい色町。昔からあった、違法商売。

夢を売って夢を買って。腐ったこんな現実に対抗してみたいに。楽園に落ちた蝶たち、蠢く欲望のままに。汚らわしくも、美しく。

綺麗なブランドのショーウィンドー。もう閉店しかけのお店で、あなた名義のカードで欲しいもの全て。

．．．全く、悪い子だね、お前は。わたしにどれほど買えというのか。

．．．私のこと好きなくせにそんなことを言えるの？

．．．ははっ。全くだ、すまないよ、さあ気の済むま

でお選び。

．．．後でちゃんと愉ませてあげる。

鼻なんかで笑う。汚らわしい笑い方、もう随分嫌気が差しているのよ。代価は高いわ。

売って買われて、与えられた달러、ウォン、元、円、ユーロそのときだけ、あなたの玩具。愛玩具らしく、愛おしく艶かしく。あなたに与えられる夢を、この身体だけで。そういつときの落ちた天女みたいに。抜け出せない楽園へ導いてあげる。

この運命が憎いとも、身体についているこの分身が憎いとも。一度も思ったことがないわけじゃない。金には飢えない。愛には飢えても。溢れるほどの寂しい人たちは恵みを落としていく。

愛欲に乱れた、汚い金を。ゴールドで飾られた虚飾の女たち。寂しいこの上、夜伽の誘い。今宵は弾むと、上品そうなマダム。また重たい腰を上げて。ブランドで飾られた全身を、重たげに動かして
・・・あなたはとても綺麗な顔立ちね、どこの生まれなの。

必ずそう聞く。だから俺は答えてやる。今宵だけの関係であるから。

・・・アジアの生まれです。

インディアン訛りの英語で。そう素っ気無く答える。関係ないだろう、どこの生まれだって。具体的に答えれば、チップは弾むかい。長身に纏った、このブランドもすべて貢物。雇い主の好意。良く稼ぐ金づるだよって。俺はこの生き方しか知らない。苦しいなんて一度もきつと思っただけは無い。ただ可笑的。面白い。俺の上で、欲望に乱れて、汚く散る花が可笑的。

愚かだよ、全くお前たちは。

綺麗に纏っても、身体の奥から湧き出るこんな黒い感情に支配されてるなんてな。

この色町の一番売れっ子で。この色町で、一番飢えている人間。ラグジュアリーに、ゴージャスに纏っても、あふれ出す飢えは拭えない。

男娼婦

その色町に捨てられたのはいつの日だったか。ただ、言葉の通じない町で、ひとりぼっち。救ってくれた男は、名前をヨセフとか言い、俺を育てた。

歳を重ねるにつれて、その正体を知った。この変な町でその、変な行為を売る男だと、理解するまでそう時間は掛からなかった。

俺の隣はいつも香水くさい、妙な男たちが行き交う。赤いタイトなズボンに、上品な黒いジャケット、そして嘘くさいまでにキラキラした、アクセサリーを身に纏った男もいた。その男は、自らをゲイと名乗っていたっけ

今となつては、まんまの名前に驚くだけだけれど。

幼少期の記憶も何もないのは幸いだと思う。きつとあつたら、もっと苦しんだ。俺は、身の上を呪つただろう。よかつたんだ、これで何も知らなくて。

俺の口付ける女たちの目は、まるで野獣のように飢えている。求めてる、俺を必死に。ヒクついて、ただ。

そんな女たちに、与えるものを与えて。俺は莫大な肥やしを得る。規定の料金に、チップ。時には、数十万くらいだし、時には数千万のときもある。可笑しいくらい舞い込んでくるその金額は、俺の感覚を少しづつ、世間からずらしていった。

俺の身体には、いつの間にか美しいくらいの筋肉と、なじみの女の香水の匂いを纏っていた。醜さと、美しさは紙一重だなど、電波の悪いテレビに映る、綺麗な人間に思う。でも結局はこいつらも欲望を纏った、あいつらと同じ生き物。

夜になつたら、美しいも綺麗もあつたもんじゃない。結局そんなもんだ、と。俺にヨセフが言ったのを思い出した。

あの男は良くも悪くも俺から、綺麗さっぱり、希望にも似た部分を摘み取っていった。

「スンヒ」

「はい」

「お客さんだ、いつもの」

「はい」

俺は狭く、ちっぽけな部屋で、溢れんばかりの高級ブランドの中からお決まりの組み合わせを選ぶ。

黒くタイトで上品なズボンに、少しダークに赤みがあったジャケット。肩パットが思った以上に邪魔で、これは重たが、あの女のお気に入りだ。俺にやる事を強いる。そして、それにあわせて、水色のような青のような、中途半端なシャツをセレクトする。品良くまとまった、黒い蝶ネクタイをしてしまえば、あつという間に仕上が。今宵の客に合わせた、最高の組み合わせ。

ロビーに出て行くと、女は夜だというのにかけていたサングラスに手をかけ、微笑む。

「スンヒ、相変わらず良く似合ってる・・・」

「ありがとうございます」

「マスター、スンヒの健康状態は？」

「何の病気にもかかってないさ、まだ。綺麗なまんまだよ」

毎週金曜は、病院で検査を徹底的に受けさせられえ。まるで飼い犬のように。性病だの、なんだのって。詳しく。

「ありがとう、じゃあ行こうか、スンヒ」

「はい、ミス・ロゼッタ」

「ふふっ・・・長くなると思うわ・・・チップはつけとくから・・・」

・明日の午前四時までには必ず返すわね、マスター」

「マダムなら御気になさらずに、さ、スンヒ」

「行ってきます」

マスターと呼ばれる、ヨセフの顔が悦びに満ちる。そう、この客は大層な大金を落としていく。一週間前だったか。確か、この女は五百万をチップに持たせた。

自慢じゃないが、俺だってそこそこ上のほうだ。基本料金だって

安くない。確か、円に換算すると、五十万はくだらないはずだ。

金を落していく、上客向けの俺の料金。それに手が届くのはお馴染みの連中しかない。少し、年増の、上品で悲しげな女たち。綺麗でも、この女たちには別の綺麗さが漂っている。哀愁から感じる、寂しいがまでの愛欲。それに埋もれた女たちは、共通に独特の雰囲気を感じていた。

全身からおう、香水のにおいに噎せ返りそうになった。気分がやはり、少し悪い。幾度嗅いでも、この匂いだけには慣れない。

「どうしたの？」

「いえ……」

「じゃあ……今日は中華を食べてからにしましょ。久しぶりに中華食べたくなっちゃった」

「はい、構いませんよ」

「どこが美味しいところ、知らない？」

「少し遠いのですが、チーパオが美味しいと聞いています」

「じゃあ、そこにするわ」

「タクシーを呼んできます」

手を挙げて、タクシーを呼ぶ。

いつもの夜が始まるのだ。

食事やら買い物やらをして、いつもの床につく。甘い夢に酔わせて、そのまま大量のチップを貰い受けて、俺は帰る。

慣れた手つきで、慣れた手順で。俺はそれをずっと繰り返していた。面白くも無い、この日常を。

俺はこの町で育って、ついに22を迎えてしまった。こんな、面白くもない町で。

娼婦

その瞳を大きく見せる為だけの、黒のコンタクトレンズをはめられる。綺麗に目の中に色をとどめて。私の顔を美しく変える。

昨日の客に強請った、新しいコスメ。別に欲しかったわけじゃないけれど、何となく気になって手にとってみたら。気がついたら、その客は私に差し出した。『君にあげよう。良く似合いそうだから』葉巻で濁った汚い歯を覗かせて、客はペラペラ良く喋る。仕方ないから私は微笑んで、ありがとうって。

赤と白しかない、可笑しなチエスみたいなこの部屋は私の唯一の部屋。それでいてただの、待機室。

いつものように、土曜の検査を受けて何も病気のないことを記した、ただの紙切れ一枚をマスターに差し出したら、マスターは満足げに笑った。そうして私にただの配給品でしかない、新しくお洒落なランジェリーを差し出す。

男の癖に妙にセンスがいい。やっぱり男、オネエマスターか何かなんだろうか。そんな疑いを持ちつつも、二階への階段が上がっていった。

部屋でごろりと、ベッドにダイブして今に至る。

部屋にいつも響いているのは、私がまだ満たされていた時代の音楽。

ここに来る前、私は日を浴びて、歌い踊る。そういう人間だった。私が歌えば、たちまちランキングは私が1位を占めていた。

ここに来る前に知った事実。私はただの養女であったということ。あの家の養女だった。

あの日、売り飛ばす話が来たという。私たちの会社ならお宅の娘さんを、高値で買います。将来を約束しますと。言葉巧みに、そう言ったという。

ベッドの上に散らかる、おとといの客の二千万。

二千万だ。私はたったの二千万で、この色の無い夜の町に身を沈

めることになったのだ。骨の髄まで黒に染まるまで。

あの真つ黒な夜の空を、あれほどにまで恐ろしいと思った日は無かった。抵抗など無駄なことはしなかった。私は馬鹿じゃなかったし、こういう局面で抵抗するほうが馬鹿だと感じたからだ。決してうぬぼれの類ではない。

快楽を、悦楽を。少しずつ、あのマスターは知識とともに身体に馴染ませていった。数週間をかけて、ゆっくりと。

この界限で私を知らない娼婦はいない。なんたって、今じゃすっかり落ちちゃってトップ。元歌姫といえど、枕ふたつ並べてやることもさすがお手の物なのね。そう囁し立てるやつらもいた。

十センチのヒールに足を通して、綺麗に歩くマネを鏡の前でしてみる。

前はこうやって私が歩き、踊れば拍手も花束も飛んできたのに。

今じゃ、飛んでくるのは噓せ返る紫煙と、札束よ。落ちたものね。そう嘲笑っても、意味もないのに。

「リン」

「はい」

「お客様よ。今日はとびっきりの上客」

「分かりました」

鮮やかな色のイブニングドレスに身を包む。翡翠色の背中の中へ開いた、ドレスは夜に映える。相手の服装だって邪魔はしないし、この上なく上品に包める。

長く艶やかな黒い髪を、赤い宝石の散りばめられた美しい装飾品でまとめる。

赤く艶やかなルージュをひいて。目の周りをまるでクレオパトラのように、縁取る。

夜にはそれで十分映える。あまり彩らなくていい。結局は闇に溶けて、分からなくなってしまうのだから。

「早くしなさいよ」

下の階からの声に、慌しくポーチを手取る。まるでパーティバ

ツクのような、小さな鞆。入れるものなど知れている。

黒のショールを肩にかけて、高いヒールに足を通す。

足早に降りて、そのままロビーに向った。

気違いな色の、カクテルに口をつけている、ひげをたくわえたお洒落な紳士。育ちのいいのが分かる。この男は初対面かもしれない。私と目が合うと、その紳士は微笑んでそつと手を差し伸べてきた。

「こんにちは、レディー」

「こんにちは」

「ああ、思ったよりも上玉だ・・・名前は、リンというのかな」

「ええ。おじさまは？」

「わたしはロイ＝マゼンダ」

「ロイさんね」

「いいや、ロイで構わないよ」

微笑む紳士は、どこか影のあるような深海のような、不思議な人だった。

惹かれていくような、そんな錯覚を今宵も味わう。

「行きましようか、ロイ」

ヒールを強く鳴らして、そのまま歩き出した。

繰り返す吐き気

何度重ねても、何度肌を合わせても、慣れやしないんだ。痛いくらいに張り付く唇に、ただの違和感と吐き気をもよおして。

何度目なのか分からない。這う舌に、ただ口を覆い隠して吐きそうなのを必死に押さえる。

客は大抵、この仕草が好きなんだという。馬鹿なんじゃないかとおもったこともある。だって、これはただの拒絶だ。お前がいやで、俺はお前の行為を受け入れるのがいやで、こんなに拒絶しているというのに。どうしてそうも、プラスに考えられるんだ。俺は痛いほどこに、感じる唇の感覚に虚飾の溜息を漏らした。まるで、たまんないみたい。

満足げに笑うマダム。可哀想に。家に戻っても旦那に愛されないがために、こんな汚い人間を抱くのか。大金をつぎ込んで、その身に不純な細胞を散らすのか。本当に信じられない、このマダムの考えることは。

「……ふっ……ミス・ロゼッタ……？」

「やっぱり食事はいいわ……ねえ」

「……分かりました」

進路の変更。ほらいつもどおり。だから最近、俺の体重は右肩下がりが。少し筋肉の落ちたからだを鍛えなおす為に、どれだけ苦労するのか。

あの男、マスターの座にいいことを良いことに、俺にいろいろと注文をつける。面倒くさいもんだよ、毎日毎日。どうして俺はこんなに飼い犬みたいに、ひれ伏して生活しているのか。分からなくなるときもある。小さい頃は、あの男に恩さえ感じていたというのにな。

タクシーがネオンの激しい町で止まって、俺らをおろす。『じゃあいつも通りマスターから、料金は頂くよ』と、領収書をちらつか

せる。俺も営業用の顔で、『お願いしますね』と返す。

タクシーが走り去って直ぐ、女はたまらないように俺に手を這わせる。ああ、可哀想に、こんなに飢えて。

けれども、不思議なもんだよ。欲望は満たされすぎると、余計に渴くつてもんなんだよ。全く正反対を支配する欲望への憧れが強くなるんだ。

ただの戯れみたいな会話。夜の街を行っていると、栄華の時代を思い出す。私が唯一、自由に歩きまわれたのは皆の寝静まる、夜中だった。夜中でも明け方の夜中。きつとこの上なく、自由に満ちていたんだろうな。少し懐かしい感覚に、いつの間にか微笑んでいたらしい。紳士は軽い嫉妬を抱いたみたいに、太ももに手を這わせる。馬鹿ね、思考まで支配できると思ってるなんて。可笑しな話。私の中はまだ、あの時と変わらないのよ。

「ごめんなさい、昼間面白い映画を見ていたの」

「どんな映画だい？」

「バーンって、撃つちゃうのよ」

「ほう、西部劇の類かい？」

「分からないわ、だって途中から見たんだもの」

「そうか」

笑い声も、何もかも嫌気が差す。ありきたりな言い訳。すぐに通じて、若干の戸惑いさえも覚える。どうしてこんなに馬鹿なの。こんなをつまんだところで、箸にもかかない。つままない男。

引き締まっているとばかり思っていた身体は、無残にも垂れ下がる脂肪にく。ああ、残念って。その気持ちにくを隠す為に、微笑んでみる。

たまのたまには、良い男にだって抱かれない。折角ならって、そう思うのに。どうしてこんなに外れ玉ばかり引いちゃうのだろうか。

「ねえ、ロイ……」

「なんだい？」

「おねだりしても、いい？」

わざと、遠慮がちに。

「ああ、構わないよ、なんだい」

「新しい綺麗なドレスが欲しいの」

「いいとも、お安い御用さ。なんなりと。君のほしいものなら、なんでもあげよう」

「ありがとう、ロイ」

そうして歳に似合わない、噛み付くみたいなキス。

幾つになっても変わらないのね。可哀想な男。こんなところで、ムダに細胞を落さないで。家に真っ直ぐ赴けばいいのに。冷え切った環境じゃ、余計に熱を欲するというものなのね。

小さい頃、御父様の出かけて行っていたのが思い出されるようで、気持ち悪い。

何度も繰り返し返す

……。

慣れないんだ、この感覚に。
幾度も、吐きそうになる。

冷めた情事の末

いつも愛情など抱かなかった。いくら強く抱かれようと、強く締め付けられようと。

ゆきずりの客は俺を、落ちていた石ころみたいに適当に扱っただけだ。売れなかった頃。変な客に酷く気に入られて、死にかけた。

簡単に言えば、過激なSMプレイだった。2時間ちよつとだった。その客が買った時間に。その間に殺されそうになっていた。信じられないほどにつまえたチップと、合法ギリギリの薬ヤク、そして身体に傷を負わず、数々の道具。恐ろしいくらいに生々しい行為によって、出血多量で死にかけた。

ただでさえ、寝不足もたたっているんだ。俺だってそう頑丈にできちゃいないし。

ときどき、どうしてこんなに必死に働いているのか分からなくなるよ。誰が為　　・・・分らない。

けれどあの日、あのホテルでつまえたチップは、たったの一千万だった。俺の命は、一千万の為に消えかけた。今なら2日もあれば儲かるチップ。その為だけに死にそうになっただなんて。

「フツ・・・」
上でクスッと笑う俺を見て、マダムが少し不愉快そうに抱きしめた。

絡める腕に腕を這わせて、マダムの仰せのままに。

豊かな両胸が、動きに合わせて揺れていた。

けれど不思議なんだよな。こんなに愛情も興奮もなにも抱いちゃいないのに。俺の身体って正直みたいで。割とちゃんと反応してる。何もつけていない、細胞同士が擦れ合って、合いもしない不協和音を体中に巡らせる。

マダムはひたすら必死に、その快樂の海に身を委ねているようだ。しきりに背中に立てる爪に、昔の記憶が時々フラッシュバックしな

がら、奉仕に集中した。

背中の中、じんじんと熱を持って熱くなってきた。薄皮一枚く
らひは覚悟していたほうがいいかもしれない。

マダムの爪先は綺麗に短く整えられて、薄い赤のマニキュアでコ
ーティングされていたが、どうやら凶器と変わるには十分だったら
しい。背中の中、ひりひりとする感覚は、まるでそれを告げるかのよう
に時折、強く痛んだ。しみた汗と、繰り返して立てられる爪。あの幼
かった頃から、ずっと消えない俺の背中の中。鏡ではみたこともな
いが、仕事仲間が言うにはかなりのものらしい。よく売れっ子だの
なんだのって、冷やかされるが。俺は全然嬉しくもなかった。

激しく数回、打ち付けた後、そのまま放った。もしかすると今回
ばかりは何か、妙な病気にでも罹るかも。

「……スン……」

「……」

「……よかった……感動しちゃった……」

「……ご期待に添えてなにより」

ふつと柔らかく微笑めば、まだつながったままの細胞がぎゅうっ
と締め上げる。

……大層、乱れた人間だ。心の奥底、ばれない程度
に毒を吐きつつ、マダムに口付けした。手馴れたマニュアル通り。

「……ねえ、もう一回……時間ある？」

「……構いませんよ。お時間も……」

「もっと……次……強く……」

「かしこまりました」

本当に嫌気が差すよ。こんなくだらないことを繰り返す毎日に。

「あつ……ちよつと……ロイ」

「何だい？フフツ」

「まだベッドじゃないわよ・・・」

「構わないだろう、買ったのだから」

「・・・仕方ないわね・・・」

扉を開けてすぐだというのに。歳のせいに盛りのついた、十分な雄。

血走った目を見るたびに、いい気がしなかった。どんどん冷めていって、ブランドへの興奮でごまかしていた性的興奮のマジックも解けて、すぐにまた覚醒していく。汚い手馴れた手つきで、フリを繰り返して。頭の隅で、これは私がしていることじゃないから大丈夫よって。正気に戻る為の、準備をしている。

順々に剥がれていく、そのドレスにどこか愛憎にも似た感情を抱く。こんなに早く脱ぐことになるんなら、もっと複雑なものを着てくれればよかった、と。

愛撫さえも不十分なくせに・・・紳士のくせにして、慌しくも貫こうとする。

これは何かの極刑か何かな訳。痛みしか伴わなくて、まるで最初みたい足の内側を赤い筋が伝った。

・・・下手くそ。以前は口にもしかなかった、そんな言葉を使うようになっていた。もちろん、口になど出したためしもないのだが。

この人の奥さんは一体、どうしているんだろう。他人の心配などしている暇などないのに、私は時々気にしてしまふ。家族がいるのなら、子供がいるのなら。こんなところで大金つんで、こんな悲しくて腐っていくだけの女を買う必要などどこにもないんじゃないかと。

「（本当に馬鹿なのは私かもね・・・）」

そんなことを思っていると、丁度いいところで涙が出てくる。

拭う、指先。温かさも優しさもない。こんな生理的な、妄想の為の涙など。

触って欲しくなど、ない。

「どうしてっ……泣く？」

「……愛おしいから……」

「……リンッ」

激しく啼く、内側から意識を話して。嘘の芝居に集中する。

どんと分泌液に、乱されていく、その足元に。私は少しずつ、吐き気も催してくる。いつも、この繰り返しなんだ。私は馬鹿だから。イヤでもなんでも、この吐き気さえもガマンできない。だから、フリで誤魔化して、必死に押さえつける。

「……ねえっ……首絞めて……」

「……何を」

「締まるから」

「……」

「殺さないでね、ロイ……」

そう、それでいい。耐えられるから。

これはまるで一種のボランティアみたいに。慈善行為みたいに。私には意味もなく、積み重ねられていく。一方的な、愛情の蓄積、愛情の飢えに付き合っ

そして朽ちていくだけの、この身。

痛みが生んだ解放

まさか、とは思ったけれど。頭の隅、予測できた事実にも、少し笑みがこぼれた。

やっと解放される　　・・・横で青ざめていくマスターを尻目にほくそ笑んだ。

定期的な検査のときだった。病気が見つかった。あの、ロイという男に抱かれた晩あたりから、違和感と痛みがあった。いつもなら何ともない繋がりがさえも、その痛みのために集中できなかつた。

その上、まだ予定日まで期限はあったというのに、出血が繰り返し返されていた。

『多分、淋病しんびょうですね・・・』

医師の残念そうな顔、もう売り物にならないっていうマスターの顔。可笑しくて可笑しくて、笑いがこぼれた。

笑い事じゃないと、マスターは怒った。医師も『あなたの身体のことなんですよ』と言った。

けれど、ここに来た時点で私の身体って私の身体じゃなかつた。もう、既に売り物で。商売道具に成り下がったこの身体に刻まれていく、汚らわしいがまでの技術にも、何にも。嫌気が差していた。

だから好都合だった。抜け出せるかもしれない。この現実から。もう、ムリに感じる必要も何もないんだ。

帰りの車の中、マスターは今までに無いくらい深い溜息をついた。

「これからどうするつもり？」

マスターの深刻そうな顔をしていた。多分、今までみたことない。

「客はとらない」

「・・・リン、あなた・・・」

「・・・いいよ、お世話になりました。マスター」

「それで済むと思っているの？今までいたあなたの世界と違うのよ」

「・・・」

「ちゃんと借りは返して」

「いくら」

「円で構わないから。丁度、あと五百万でチャラだったのよ」

「・・・」

無一文になつてしまふ・・・頭のどこかで現実めいた思考が生まれてきた。

「一千五百万・・・あなたの初期投資よ。そこまできれいにするのも、食わしていくのもタダじゃないの。天引きしていたわ、今までは」

「ああ・・・そう」

どうでも、いい。関係ない。天引きされようと、どうされようと。

「あなたがそれを払えば、後は路頭に迷おうが、どうしようが・・・いいわ・・・関係ない・・・それに新しい子も入ってくるの・・・明日」

「・・・払います・・・ここから出て行きます」

「ええ、払つてくれるなら止めやしない。無理強いもしない。行きたいところに行けばいいわ」

「・・・」

そのまま無言で、マスターにはちゃんと五百万を支払った。

マスターは暗い顔をしたまま、その札束を受け取った。いつかの、チップと一緒に。

後ろ髪を引かれるわけでもない。思いを残した訳でもないのに、どこか後ろめいた思いと恋しさがこみ上げてきた。

嘘をついても、どんなに嘘をついても。私は紛れもなく、あの娼館の一番の売れっ子だった。一番に売れて、一番に可愛がってもらっていたんだ。気がついたら、上にいた姐さん達は、皆いなくなっ

ていた。同じ運命を辿ったのかもしれない。・・・小さな鞆につめた最小限の荷物に目をやって、一瞬思った。とりあえずの間、この宝石を換金してしまおう。

もう飾る必要もないんだ。ブランドのＴシャツにタイトで短いスカート。店のガラス扉に映る。・・・何年ぶりかの普通の格好に、戸惑いながらも歩みを進めていった。

もうこの町に思いいれも、帰ってくる必要もない。旅をしよう。どこかに行ってしまうおう。

そうしながら、寂しく死に場所を探そうって。

高級娼婦がこの有様よ。笑ってよ、誰かって。

くすつともれ出る嘲笑いに、誰も振り向きやしない。まだこの町は夕方。スタイルのセットやら、早くから客引きやらに余念のない店は、とつくにのぼりを出していた。

「あ、ちよつとそこのお嬢さん、うちで働かない？」

「ごめんなさいね、私、淋病患者なの」

「あら、お気の毒に。失礼しました、ほなさいなら」

「さようなら」

ふつと笑う、綺麗な女性。支配人かなにかかしら。いいえ、どうでもいいわね。もうこの店に用などないんだもの。

悲しくも無いのに、涙が伝った。

突拍子もないビルの隙間風が頬を、強く叩くように吹き抜ける。

丁度良い、これくらい強いほうが今の私には、良い。

「お嬢さん」

クリアに美しい声に振り向いた。

黒髪の、きれ長く釣り目のどこかアジアな青年。・・・

こんな時間からこんなところに・・・男娼婦なんだろうか。いらない思考は驚くくらい早く回った。

「落しましたよ」

「・・・」

身分証明を落としたらしい。青年の手に、乗っているそれは、こ

こを出ればもう必要はない。

「・・・お嬢さん？・・・いや、オレゴンさん・・・」

オレゴン・・・懐かしい響き。リン＝オレゴン。何て懐かしくって幸せな響きなんだろう。

「もういらなの」

「・・・出て行くんですか」

「売り物にならなくなっちゃった」

「行くあては？」

「ない」

「・・・」

「名前は？フルネーム」

「・・・スンヒ・・・チョウ＝スンヒ」

「・・・綺麗な名前」

「・・・男娼婦だよ、俺は・・・同じだろう」

「同じね」

「・・・」

「もう会わないよね、きつと」

「会わないな・・・出て行くな」

「それはあなたが持つてて・・・死人にそんなもの要らないわ」

「・・・死人のものを持つてているつもりはない」

押し出そうとする、その紙切れに私はふつと目をやった。

「もしかすると取りに帰ってくるかも。持つてて」

「何で俺が・・・」

「出会っっちゃったから」

「・・・」

驚いたみたいに目を軽く見開いた。形の良い唇が、少し下に下がってすぐに元に戻った。

諦めたみたいに笑う、スンヒ。

「よろしくね、スンヒ」

「・・・分かった」

「観念したみたいね」

「多分、俺、君を知ってる」

「知ってる当たり前だわ・・・」

「え？」

『だって売れっ子の歌手だったのよ』

紡ぐことの無い言葉を、上の空で喋る。声を出す気なんて無い。

少し高めのヒールを強く打ち付けて、歩き出した。面食らったみたいな、スンヒが呆然と立っていた。

あと数十メートルも歩けばゲートだ。出て行ける。関門も何も無い、この歓楽街。

さあ、死に場所を探しにいかうか。

腹部に感じる鈍痛を無視して、私はひたすらに歩みを進めた。

穢れた記憶

天、我をば愛することなかれ　　．．．夢の中の母は必死に神にしがみついて。なんだか酷く滑稽だった。けれども、それは一層に悲しみを引き立てるものもあつた。

母は、どう過ごしているのだろう。思わずにはいられなくなった。

そもそも、あの女性との出会いがそうさせたのかもしれない。

何に飢えるわけでもなく、何か冷めたような瞳をしていた。暗く陰りを含んだあの瞳の奥、酷く諦めにも似た色がにじみ出していた。これから生きていく人間のする目じゃないなつて。頭の隅で感じていた。

見ず知らずの自分に、大事なものを預けていくのも、そもそも可笑しいし。

整理しきれない情報を、ベッドの中で悶々と考えていた。

傍らで眠る客は、起きそうにもない。マダムと呼ぶより、ミスと呼んだほうが相応しいような。うら若い女だった。豊かなブロンドの髪を、肩まで伸ばした魅力的なルックスをした少女。おそらくどこかの富豪の娘なのだろうが。不謹慎にも世も末だなと、思った。こんなルックスを持ちつつも、外の世界では満たされないのか。そう、若干の疑問と興味を抱いていた。

アイスブルーの瞳が、やけに目に張り付く。

．．．こうやって俺が客を取っている間も、あの女性はどこかを歩いているんだろうか。

頭から離れないなんて、俺らしくもない。

多分もう、二度と会わないだろう、あの行きずりの娼婦に。こんなに心を、捕らわれるなんて思いもしなかった。

「……スンヒ……」

「どうかしましたか？」

「……ううん……どっか行った気がした」

「……ここに」

「……うん」

「まだ寝ますか？」

「添い寝して……追加料金は支払うから」

「……ありがとうございます」

満足げに笑って、また眠りにつく。本当に、世も末かもしれない少女の目はどこか、物語の中の王子様を見るような、そんな様子だった。

可哀想に。満たされない現実のせいで、こんなところで若いときから、その身を汚さなくてはいけないなんて。

死に場所などどこでもよかった。肥溜に落ちようと、それはそれで。そこで死したとて、これといって未練も、恥ずかしさも何もなかった。恥も何もかも、あの娼館で味わってきたせいで鈍っている。もしかすると、恥などもう、この身にはないのかもしれない。穢れるだけ、穢れてきたのだから。

久々に外に出たせいで、余計に何も分からなかった。

もしかするとあの、小さな困いの中で死んでしまった方が賢明だったかなって。少しばかりの後悔をした。ああ、馬鹿だなんて。

歩いて、歩いても広がる野山ばかり。何も無い、何も通らない。ここはどこかすら分からない。さっきまでのあぜ道はなくなっていて。ところどころに咲く、刺々しいくらい毒々しい曼珠沙華まんじゅしゃげに目がいく。綺麗に毒をもったように赤を誇って。その胸を張って咲く、その花に。どこか親近感すら抱いてしまう。

こんなに山奥なんだから。墓地でもなんでもあればいいのになあ

って。どこか願望めいた思いが胸にあった。

ふと目を向ければ、暗みがあった町。ネオンがざわめいていた。さつきまでいたあの町だ。歓楽街は今からが稼ぎ時だ。忙しく輝くネオンはまるで娼婦たちのようだ。

戻りたいとは思わない。けれども。

頭の隅から離れない存在がいた。あの、最後に出会った

・・・あの男の、どこか寂しそうな恨めしそうな、何ともいえな
い強い感情の籠った瞳が。

今宵も客を取っているんだろうか、と。少しばかり気に掛かって
仕方がないのだ。どうしてこんなに惹かれているのか、自分でも分
からない。

惚れたわけではない、というのに

・・・。

初めての後ろ髪を引かれる感覚に、戸惑いながらもまた、外れた
あぜ道を進んでいった。

ただ、ただ、死に場所を求めて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2538ba/>

愛獣 AIJU

2012年1月14日04時56分発行